

## 第3章 第25次調査（附属図書館蔵本分館増築Ⅱ期地点）

### 第1節 調査の概要

#### 1. 調査にいたる経緯

本学蔵本キャンパス北側中央付近に附属図書館蔵本分館の増築が計画された。建設予定地の南側に隣接する第12次調査（附属図書館蔵本分館増築）地点では、弥生時代後期～近世の溝が検出されている。本建設予定地でも、これに関連する遺構が広がっていることが予測されたため、430 m<sup>2</sup>の範囲について発掘調査を実施した。

#### 2. 調査体制と期間

調査の概要は以下のとおりである。

調査主体 国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室（室長・中村 豊）

調査担当 中村 豊

遠部 慎（埋蔵文化財調査室・助教）

調査補助 中原尚子・板東美幸・前田千夏・山本愛子（以上、施設マネジメント部・技術補佐員）

調査期間 2011年10月6日～26日

#### 3. 調査地点の位置と区割り

##### (1) 調査地点の位置

調査地点の所在地は徳島市蔵本町3丁目18番地の15で、蔵本キャンパス北側中央付近に位置する。

##### (2) 調査区の区割り

建物増築部分が東西2箇所位置することから、西区と東区の2つの調査区を設定した（第28図）。

#### 4. 発掘調査の概要

本遺跡では現地表下に、1 近世、2 弥生時代前期末・中期初頭～中世、3 弥生時代前期中葉の概ね3枚の遺構面が存在することがわかっている。しかし、本調査地点西区では、第1遺構面に相当する顕著な遺構はみられなかった。また、他地点で第2・3遺構面の間にみられる黄褐色細砂層も観察できず、第3遺構面相当の旧地表面において、旧河道と自然落ち込みを検出するにとどまった。

土層の堆積状況からみて、自然落ち込みは旧河道埋没後に形成されたと考えられる。旧河道は、幅10m前後の大規模なものである。検出面から2mほど掘り下げた時点で湧水が生じた。調査に危険が伴い、遺物もほとんど出土しないことから、それ以上の掘削を中止した。

また、東区は調査区全面が、西区において検出された旧河道の埋土に相当する可能性が高いことがわかった。

## 第2節 調査成果

### 1. 基本層序

基本層序について西区北壁 A-A' 土層断面（第29図）に基づき説明する。

**1層** 暗灰黄色 2.5Y5/2 のシルトで、鉄分を含む。上面の標高 1.8 ～ 2.0m、厚さ 5 ～ 10 cmである。中世～近世に形成された層であろうか。

**2層** オリーブ褐色 2.5Y4/3 の粘土で、マンガンを含む。上面の標高 1.8m、厚さ 10 ～ 20 cmである。

**3層** 暗オリーブ褐色 2.5Y3/3 の粘土である。土壌化する。上面の標高 1.6 ～ 1.7m、厚さ 5 ～ 15 cmである。

**4層** 黒褐色 2.5Y3/1 の粘土である。土壌化する。上面の標高 1.5 ～ 1.7m、厚さ 10 ～ 20 cmである。

**5層** オリーブ黒色 5Y3/2 の粘土である。土壌化する。上面の標高 1.4 ～ 1.6mである。

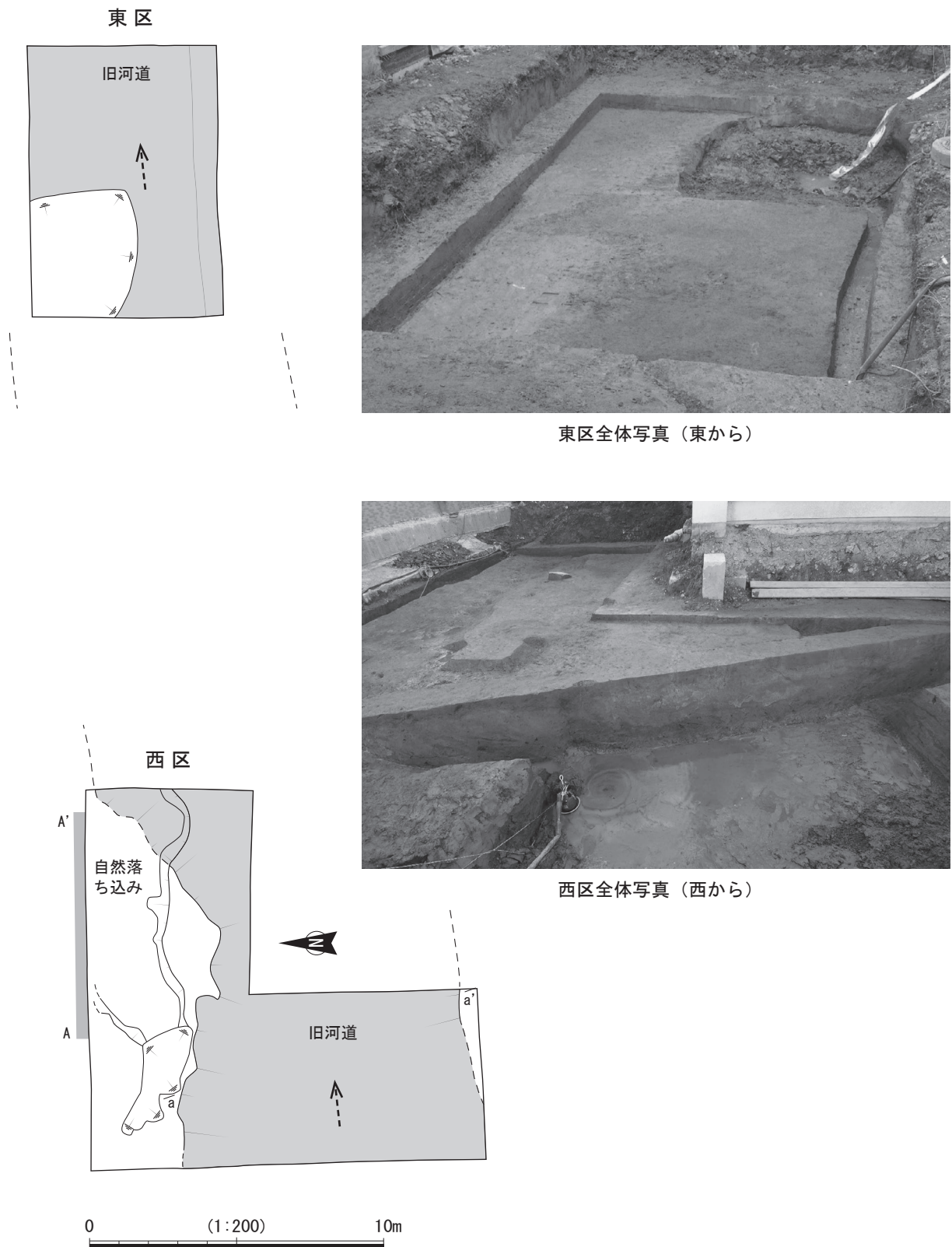
他地点で広域にみられ、弥生時代前期中葉～前期末・中期初頭に形成されたと考えられる洪水起源砂層（黄褐色細砂層）は、本地点では検出されていない。なお、黄褐色細砂層は本地点の1層と2層の間に相当する。2～5層の形成時期は弥生前期以前と考えられる。

### 2. 遺構と遺物

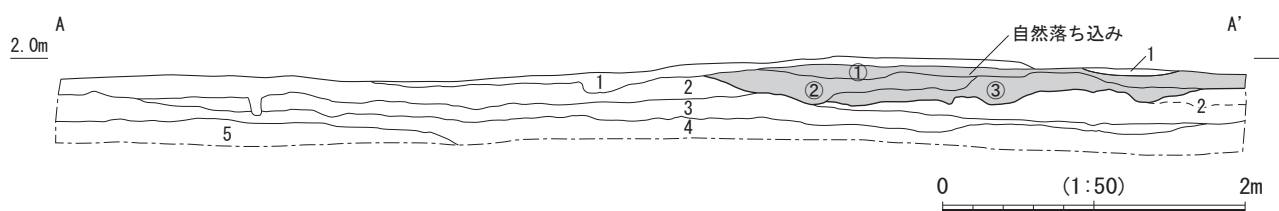
#### (1) 旧河道（第28・30図）

西区では東西方向にのびる。検出面は弥生前期以前に形成されたと考えられる第2層上面であるが、本来の遺構形成面はこれより上位に存在した可能性が高い。検出面で幅10m前後、深さ1.1m以上と規模が大きい。また、肩に段を有する断面形態である。なお、東区では旧河道埋土が調査区全面に堆積していると判断された。埋土は1～8層が粘土、9～12層は極細砂が中心となり、上層から下層にかけ粘質から砂質になる傾向がみられる（第30図）。また、底面を検出できなかったため旧河道の水流方向は判断できないが、既往の調査成果によると本調査地点周辺は南西から北東にかけ傾斜する地形であることがわかっており、本旧河道も西から東への水流が想定される。なお、本調査地点の西側に位置する第26次調査（本書第4章）で検出された旧河道2と同一の遺構である可能性が高い。

**出土遺物**（第31図、第3表、図版2） 出土遺物は少なく、図化できるものは1点のみであった。1は口縁部片である。口唇部は平らで上に肥厚する。時期は弥生時代中期以降であろう。このほかに、モモの核と考えられる植物遺存体が1点出土している。



第28図 遺構全体図



## 〔基本層序〕

- 1 暗灰黄色 2.5Y5/2, シルト, Fe 含む
- 2 オリーブ褐色 2.5Y4/3, 粘土, Mn 含む
- 3 暗オリーブ褐色 2.5Y3/3, 粘土, 土壌化
- 4 黒褐色 2.5Y3/1, 粘土, 土壌化
- 5 オリーブ黒色 5Y3/2, 粘土, 土壌化

## 〔自然落ち込み〕

- ① オリーブ褐色 2.5Y4/4, 細砂～極細砂, Fe 含む
- ② 暗灰黄色 2.5Y4/2, 粗砂～細砂, Fe 含む, 土器片含む
- ③ 暗緑灰色 10G4/1, 粗砂～細砂, Fe 含む, 土器片含む



第29図 西区北壁 A-A' 土層断面

**時期** 本遺構は検出層位や遺物から時期を決めることができない。なお、本遺構と一連の旧河道の可能性のある第26次調査の旧河道2は、検出層位と出土遺物からみて、弥生時代前期末～古代の一時期と考えられる。

## (2) 自然落ち込み (第28・29図)

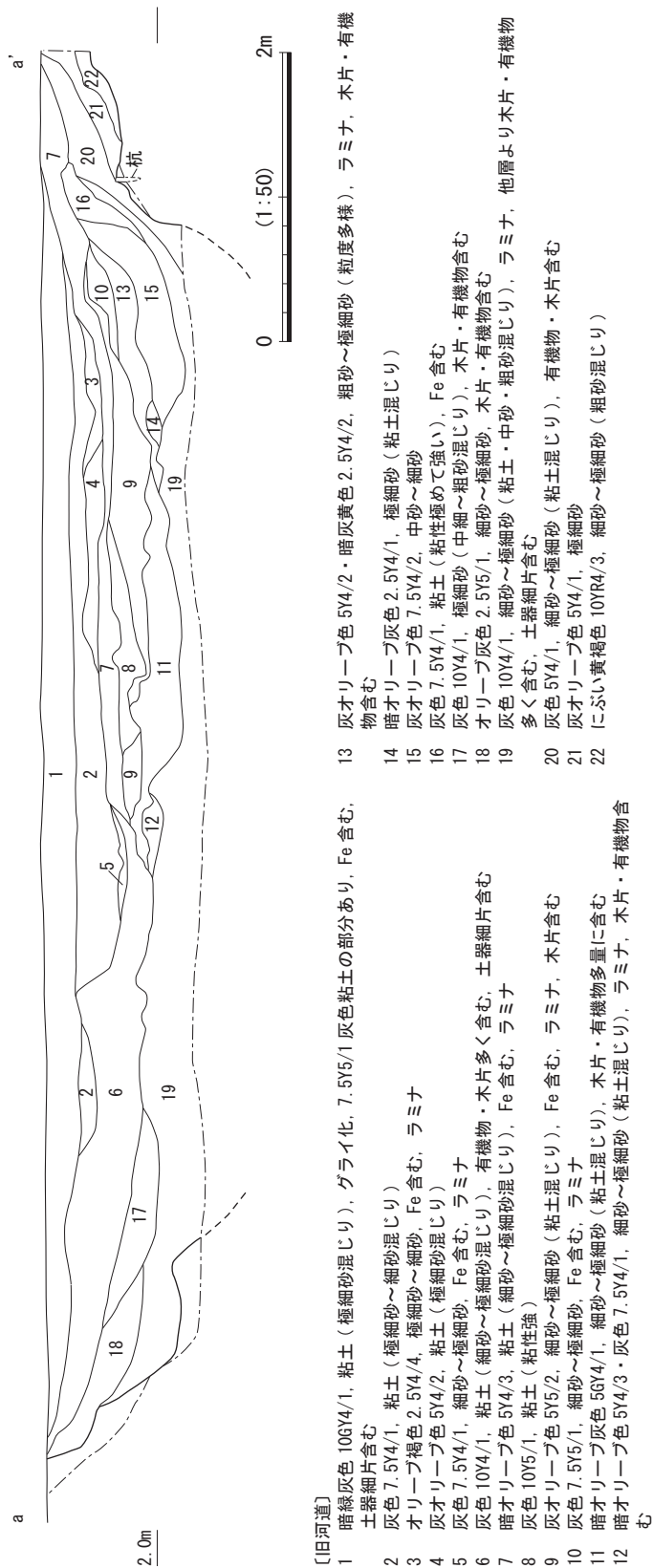
西区北側の2層上面で検出された。旧河道と同様、本来の遺構形成面は上位に存在したと考えられる。検出面では、南北3.5m以上、東西8.5m以上、深さ25cmである。埋土は3層認められ、何れも砂質である(第29図)。自然落ち込みは旧河道を切っており、旧河道の埋没後に形成されている。また、人為的なものではなく自然に形成された落ち込みと考えられる。

**出土遺物** (第31図、第3表、図版2) 2は口縁部片である。口縁部端部がわずかに外反する。古代の土師器杯もしくは皿であろうか。3は古代の土師器杯の底部と考えられる。外面は回転ナデ調整である。このほかにモモの核と考えられる植物遺存体が1点出土している。

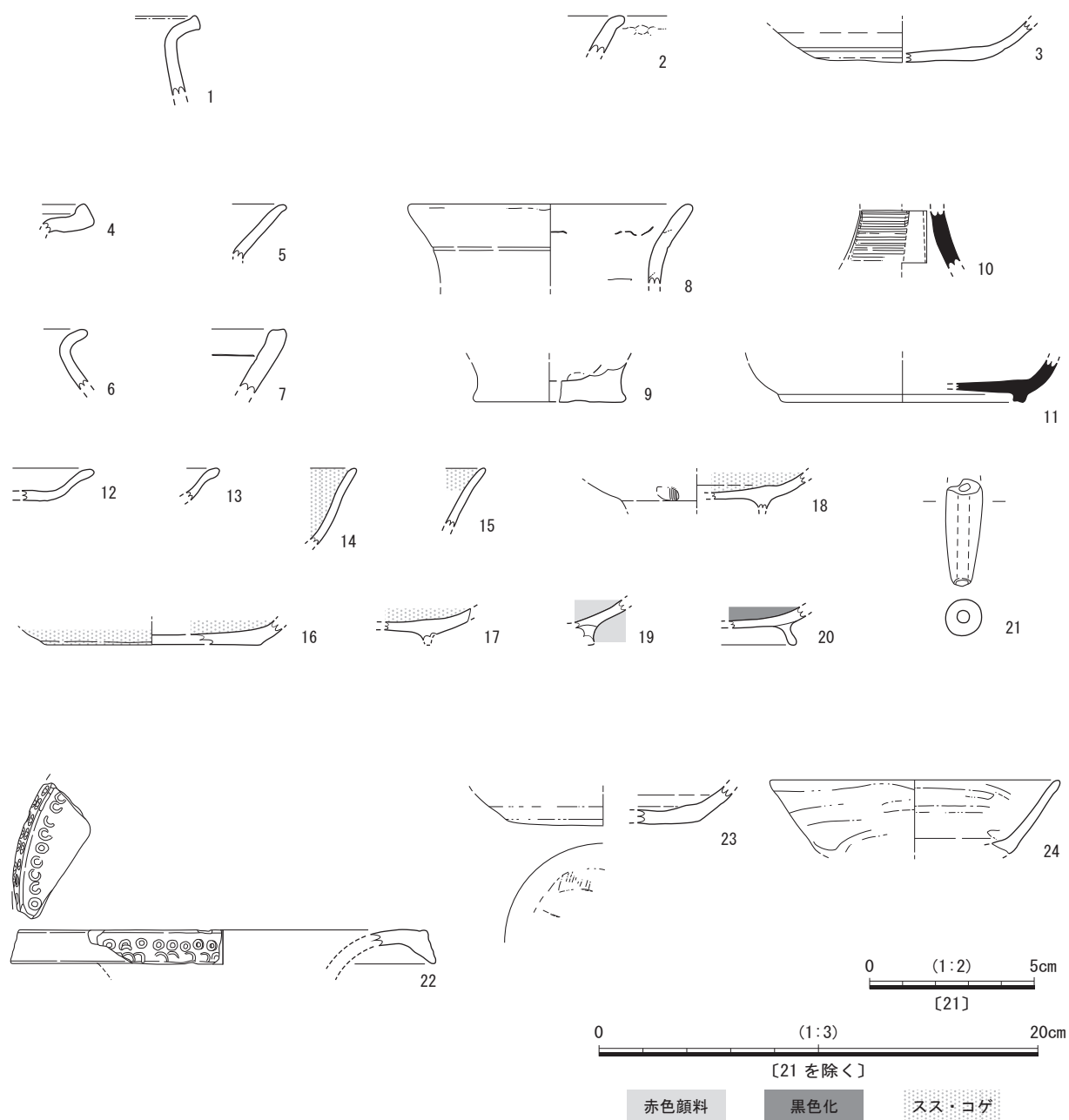
## (3) 包含層・攪乱出土遺物 (第31図、第3表、図版2)

4～8は土師質の土器口縁部である。4は端部がわずかに凹み上に肥厚する。7の口唇部はわずかに





第 30 図 西区旧河道 a-a' 土層断面



第31図 出土遺物

に凹む。8は口縁部下に浅い沈線がめぐる。弥生時代前期の壺の可能性もあるが、前期の壺と比べると沈線が不明瞭で口唇部が丸く、また接合痕も前期に典型的な幅広粘土帯―外傾接合とは異なるようである。9は底部で、中央部に焼成後穿孔がみられる。弥生土器と考えられる。10・11は須恵器である。10は高杯脚部と考えられる。方形透かしが2方向に残り、本来は3～4方向に施されていたとみられる。外面はカキ目調整、内面は回転ナデ調整である。時期は6世紀代であろうか。11は高台をもつ底部である。内外面とも回転ナデ調整が認められる。

12～19は古代の土師器である。12・13は皿である。口唇部は肥厚し、口縁部はわずかに外反して開く。14・15は杯と考えられる。口縁部はゆるやかに外反して開く。外面は回転ナデ調整である。

第3表 出土遺物観察表

番号	器種	法量[cm], ( )は復元			文様・調整 (外/内)	色調 (外/内)	備考	調査 区	遺構	層位
		口径	底径	器高						
1	弥生土器/土師器・一	—	—	—	ナデ/ナデ	にぶい橙7.5YR7/3/ 褐灰7.5YR6/1		西	旧河道	—
2	古代土師器?・杯/皿?	—	—	—	ユビオサエ・ナデ/ナデ	にぶい橙7.5YR7/4/ にぶい橙7.5YR7/4		西	自然落ち込み	—
3	古代土師器・杯	—	(8.0)	—	回転ナデ/一	浅黄橙7.5YR8/4/ にぶい黄橙10YR7/3		西	自然落ち込み	—
4	弥生土器/土師器・一	—	—	—	ナデ/ナデ	にぶい黄橙10YR6/4/ にぶい黄橙10YR6/4		西	包含層	—
5	弥生土器/土師器・一	—	—	—	—/—	にぶい黄橙10YR7/3/ にぶい黄橙10YR7/3	摩耗顕著	西	包含層	—
6	弥生土器/土師器・一	—	—	—	ナデ/ナデ	にぶい黄橙10YR6/3/ にぶい橙5YR6/3		西	包含層	—
7	弥生土器/土師器・一	—	—	—	ナデ/ナデ	にぶい褐7.5YR6/3/ にぶい黄橙10YR6/4		西	包含層	—
8	弥生土器/土師器・壺?	(13.0)	—	—	沈線1条・ナデ/ナデ	明黄褐10YR7/6/ にぶい黄橙10YR7/4		西	包含層	—
9	弥生土器・底部	—	(7.0)	—	ナデ/ユビオサエ・ナデ	にぶい黄橙10YR6/4/ にぶい橙7.5YR6/4	焼成後穿孔	西	包含層	—
10	須恵器・高杯	—	—	—	カキ目/回転ナデ	灰N6/0/灰N6/0	方形透かし2方向以上	西	包含層	—
11	須恵器・蓋杯身	—	—	—	回転ナデ/回転ナデ	灰白N7/0/灰白N7/0		西	包含層	—
12	古代土師器・皿	—	—	—	—/—	にぶい黄橙10YR6/3/ 灰黄褐10YR6/2		西	包含層	—
13	古代土師器・皿	—	—	—	—/—	にぶい黄橙10YR6/3/ にぶい黄橙10YR6/3	摩耗顕著	西	包含層	—
14	古代土師器・杯	—	—	—	回転ナデ/一	にぶい橙7.5YR6/4/ 灰褐7.5YR5/2	内面コゲ付着	西	包含層	—
15	古代土師器・杯	—	—	—	回転ナデ/一	にぶい橙7.5YR6/4/ にぶい橙7.5YR6/4	内面コゲ付着	西	包含層	—
16	古代土師器・杯/皿	—	(9.7)	—	—/回転ナデ	黄灰2.5Y4/1/ 暗灰黄2.5Y4/2	外面スス付着・内面コゲ付着	西	包含層	—
17	古代土師器・杯	—	—	—	—/—	にぶい橙5YR6/4/ にぶい褐7.5YR5/4	結合痕, 内面コゲ付着	西	包含層	—
18	古代土師器・杯	—	—	—	ユビオサエ・刷毛目?/一	にぶい褐7.5YR6/3/ にぶい褐7.5YR5/3	内面コゲ付着	西	包含層	—
19	古代土師器・杯	—	—	—	—/—	赤褐2.5YR4/6/ にぶい赤褐2.5YR4/4	内外面赤色顔料	西	包含層	—
20	黑色土器・碗	—	—	—	—/—	にぶい橙7.5YR6/4/ 暗灰N3/0		西	包含層	—
21	土錘	—	—	—	—/—	にぶい橙5YR6/4/ にぶい橙5YR6/4	摩耗顕著	西	包含層	—
22	弥生土器・壺	(19.4)	—	—	竹管文・ナデ/ナデ	にぶい橙5YR7/3/ にぶい橙7.5YR7/3		東	表土・攪乱/旧河道	—
23	古代土師器・杯	—	(8.6)	—	ヘラ切り?/回転ナデ	橙7.5YR6/6/ 橙7.5YR6/6		東	表土・攪乱/旧河道	—
24	古代土師器・杯	(13.4)	—	—	ナデ/ナデ	橙7.5YR7/6/ 橙7.5YR7/6		東	表土・攪乱/旧河道	—

内面にコゲがつく。16は土師器杯もしくは皿の底部である。内面は回転ナデ調整である。外面にスス、内面にコゲがつく。17・18は高台付杯と考えられる。内面にコゲがつく。17は粘土帯の接合痕がみられる。18の外面調整は横方向のナデ調整で、一部に刷毛目状の痕跡が認められる。19は高台付杯で、内外面に赤色顔料が塗布される。20は黑色土器A類の碗である。高台端部はわずかに肥厚する。高台貼り付け部で剥離している。9～10世紀に位置づけられる(早淵1994・1999)。21は土錘である。

このほかに、西区包含層でモノの核と考えられる植物遺存体が1点出土している。

22～24は東区の重機掘削中に出土した。出土層位は表土・攪乱もしくは旧河道1埋土の可能性

を含む。22は壺口縁部と考えられる。垂下する口縁をもち、竹管文が口縁部外面に2段、上面に1段施される。時期は弥生時代後期後半頃であろうか。矢野遺跡で類例がみられる（近藤編2001）<sup>1</sup>。23・24は古代の土師器杯である。23は底部である。内面は回転ナデ調整である。底部接地面はヘラ切りであろうか。24の口縁部は直線的に開く。内外面ともに横方向のナデ調整である。口縁部と底部の境界に粘土帯の接合痕がみられる。黒谷川宮ノ前遺跡の溝17（SD1017）に代表される10世紀前半の資料と形態・サイズが類似する（早渕1994・1999）。ほかに東区の重機掘削中に、サヌカイトの剥片、モモの核と考えられる植物遺存体が1点出土している。

（三阪）

## 註

1. 近藤玲氏よりご教示をえた。

## 文献

- 早渕隆人, 1994. 黒谷川宮ノ前遺跡における古代の土器様相について. 菅原康夫（編）, 黒谷川宮ノ前遺跡：四国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書, 徳島県埋蔵文化財センター調査報告書第9集. 徳島県埋蔵文化財センター, 徳島, pp. 369-376.
- 早渕隆人, 1999. 徳島県内における古代土器様相：川端遺跡出土土器の位置づけ. 栗林誠治（編）, 金泉寺遺跡・川端遺跡：徳島県中央構造線断層帯調査に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書, 徳島県埋蔵文化財センター調査報告書第32集. 徳島県埋蔵文化財センター, 徳島, pp. 122-129.
- 近藤玲（編）, 2002. 矢野遺跡（Ⅰ）：一般国道192号徳島南環状道路改築に伴う埋蔵文化財発掘調査第2分冊, 徳島県埋蔵文化財センター調査報告書第33集. 徳島県埋蔵文化財センター, 徳島.
- 大久保徹也, 2002. 中国・四国地方の土器. 赤塚次郎（編）, 考古資料大観第2巻, 弥生・古墳時代土器Ⅱ. 小学館, 東京, pp. 159-168.